

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

—— 漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ ——

漢文の基本構造編

【第3回】 助動詞編

今回は助動詞だ。がんばろう！

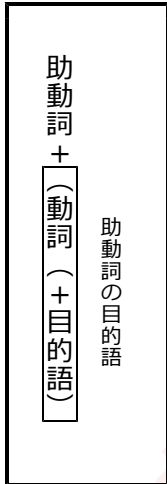
1. 助動詞

助動詞は、中国では能願動詞のうがんっていう。

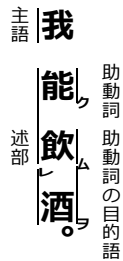
つまり可能や願望を表す動詞うごってことさ。

その名が示すようにもともと動詞なんだが、単独で述語にはなれずに、述語動詞や述語構造（述語＋目的語）を目的語にとるという独特の働きで、意味を添えて述部を構成するんだ。

だから、本当は次のような構造をとる。

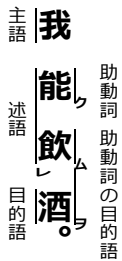


たとえば、可能の助動詞「能」の場合、「私は酒を飲むことができる」なら、「我能飲酒」となる。これを右のように分解すると、次のようになる。



本来は、「能」がもともと動詞で、「酒を飲むこと」を「能」（できる）とするってことだからな。でもこのように説明すると、主語「我」に対して、残りの「能飲酒」全部が述語ということになってしまっただけで、成分の説明が大まかになりすぎてしまうだろう？

だから、ためぐち先生は、本来の構造とは違うんだということを知った上で、あえて次のように説明したいと思う。



こうすることで、「我能飲」酒は、主語「我」＋述部「能飲」＋目的語「酒」の構造と、成分構成がわかりやすくなるからね。
つまり、次のようになる。

(主語) + 助動詞＋動詞 ≡ 述語 (＋目的語)
助動詞の 目的語

本来の構造とは違う説明になるけど、ためぐち漢文では、便宜的にこれでいくぞ。

さて、助動詞には、「～できる」という可能や、「～したい」という願望を表すもの以外に、今では「～するべきだ」という義務や当然、「～される」という受身の意味を表す語も助動詞に含めてるんで、順番に説明していくぞ。

◎ポイント！…助動詞は動詞を目的語にとって様々な意味を添え、述語を構成する。

(主語) + 助動詞＋動詞 ≡ 述語 (＋目的語)

2. 可能の助動詞

可能の助動詞には「能」「可」「得」「足」の四つがある。

基本「～できる」という意味だが、実は漢字によつて微妙に意味が違うんだ。

①可能の助動詞「能」

まず「能」の用法からいこう。

「能」は能力的に可能であることを表すんだ。

能勝人之口、不能服人之心。

▼能く人の口に勝つも、人の心を服する能はず。

▽人の口に勝つことはできるが、人の心を従わせることはできない。

助動詞「能^ク」が動詞「勝^ッ」や「服^ス」を目的語にとり、「能^ク勝^ッ」（勝つことができる）、「能^ク服^ス」（従わせることができる）の形で述語を構成しているのがわかるかな？

よくいるじゃないか、めちやくちや弁論がうまくて、徹底的に相手をやり込めちゃう奴って。でも、結局やりこめられた相手は恨みこそ抱いても、心服したりなんて絶対しない。そういうこと言ってる例文だな。君らも肝に銘じろよ！

さて、注意しなきゃならないのは、「能」が肯定文と否定文の一部で読み方が違う点だ。

「能^よ A」は「能^よく A する」って読むが、それを「不」で否定した「不能^ア」は「A する（こと）能^{あた}はず」って読む。

一方、否定文でも「無能^ア」とか「莫能^ア」の場合は、「能^よく A する無^なし」「能^よく A する莫^なし」って読む。

要するに「不能」の時だけ読み方が違うってことだよ。

でも、いいかい？ 中国語では「能^ア」であろうが「不能^ア」であろうが、「能」は同じ発音で読むんだぜ。

読み方を変えてるのは日本の訓読の習慣であって、「（能力的に）～できる」という意味は変わらないよ。

◎ポイント！…可能の助動詞「能」は「（能力的に）～できる」という意味を表す。

・「能^よ A」と「不能^ア」で、次のように読み方を変える。

能^ク A。^ス

▼能^よく A する。

▽A することができる。

不^レ能^ハ A。^{スル}（コト）

▼A する（こと）能^{あた}はず。

▽A することができない。

※否定文でも、「無能^ア」「莫能^ア」の場合は、「能^よク」と読む。

無^シ能^ク A。^{スル}

▼能^よく A する無^なし。

▽A することができるものはない（いない）。

莫^シ能^ク A。^{スル}

▼能^よく A する莫^なし。

▽誰も（何ものも）A することができない。

② 可能の助動詞「可」

「可能」の「可」だから「できる」って意味はあるだろうって、容易にわかると思うが、なかなか手強いのがこの助動詞「可」なんだ。

なんといつても意味が広い。

順番に理解していこう！

臣、舍人、蘭相如、可^レ使^ス。

▼臣^{しん}の舍人^{しゃじん}蘭相如^{らんしやうじよ}が使^{つか}ひすべし。

▽私の側仕えの蘭相如は使いにしようしい。

「可」は日本語の助動詞「べし」と読むから、書き下す時は平仮名にするんだぞ！

右の書き下し文もそうなるだろう？ 気をつけろよ！

この例文は、これまた有名な「完璧」のことばのもとになった、趙^{ちやう}の国の名臣^{りんしやうじよ}蘭相如のお話だ。

君らは「和^{かし}氏の壁^{へき}」って知ってるかい？

天下一の宝玉、美術品だよ。

今ならさしずめミロのビーナスかモナ・リザなみだよ。

それを趙の王様が手に入れたことを知った大国、秦の国の王様が、十五の都市と交換してほしいと要求してきたんだ。

趙の宮廷はそりやもう大混乱さ。

だって、断ったらそれを理由に攻め込まれるし、かといって宝玉渡してしまったら、もらうだけもらって十五の都市はくれんかしれん。

約束だから都市くださいよぉって言ったって、「そりやなんのことですかいな？」とか言われたらそれまでだろ？

小国の悲哀だよなあ…

困りはてちゃって、そもそも使者として、いったい誰に秦の国に行かせるねん！とか迷ってたたら、宦官^{かんがん}の繆賢^{びやうけん}って人が「私の使用人の蘭相如なら使いにしようしい！」って進言したわけ。

この宦官、知ってたわけよ、蘭相如がただものではない人物だってさ。

で、さっそく呼び出された蘭相如、趙王の面前で「秦王に約束する気がないとわかったら、壁を完全な形で持ち帰ります！」って宣言して、秦の国にでかけていくんだ。

そして、秦王を相手に一歩もひかないどころか、むしろぎゃふん！と言わせて帰ってくるんだよ。

そのエピソードから「完璧」ってことが生まれたんだぜ。

だから「壁」じゃなくて「壁」って書くんだ。
え？「完璧」って書いてたって？　おいおい…

さて、実は助動詞「可」は、もともとこの例で用いられている、**許可の意味が基本**だ。
「〜してよい」という意味だな。

そこから、してよいのだからするべきだという意味に転じるんだ。

樊噲可斬也。

▼樊噲は斬るべきなり。

▽樊噲は斬るべきだ。

それがこの例。

ここでは**当然の意味**。

「〜するべきだ」と訳す。

子可還矣、母空受其禍。

▼子還るべし、空しく其の禍ひを受くる母かれ。

▽あなたは戻ったほうがよい、いたずらにその災いを被ってはいけない。

さらにはこの例のように、**適当の意味**も表すようになった。

「〜する方がよい」とて意味だな。

往者可、来者不可知。

▼往くは知るべく、来たるは知るべからず。

▽過去は知ることができるが、将来は知ることができない。

最後に、**可能**。

「〜できる」という意味。

これは、「内実を十分に兼ね備えて許可できる」という意味から、「〜できる」という**可能の意味**を表すようになったんだよ。

可能の助動詞「可」は、結局のところ、**可能・許可・当然・適当**など、色々な意味を表すわけだ。

この可能の意味の場合、成立の経緯から、「許可されているので」～できる」という意味でよく用いられるけど、「能」と同じく「(能力的に)～できる」という意味も表すこともあるんだよ。

うまいことに、日本の古典語「べし」が、「可」のもつ意味をきれいにカバーできるんだ。だから「べし」と訓読するようになったんだね。

ところで、助動詞「可」が接続詞「以」と併用されて「可_ニ以_テ」の形をとることがある。

「可」単独で用いられる場合と、ほぼ同じ意味を表すと考えていいんだが、ほんとに用法には少し違いがあるんだ。

たとえば、「胡_ハ可_シ伐_ツ」という文はどういう意味だい？

「胡の国は攻めてもよい」という意味だよ。

どこの国を攻めようかと考えて、色々あるけど、胡の国が攻めてよい国だと判断したわけ。

つまり攻められる対象が「胡」だから、「胡」は受事主語になる。

でも「胡_ハ可_ニ以_テ伐_ツ」だと、そういう意味にはならないんだ。

これだと「胡の国はどこか別の国を攻めてもよい」という意味になってしまっ。

それは「可_ニ以_テ」という述語が、通常施事主語を主語にとるからなんだ。

つまり、単独で「可」が用いられた文が受事主語をとることができるのに対して、「可_ニ以_テ」はそれではきないってこと。

難しいからあまりこだわらなくてもいいけど、違いはあるんだぜ。

◎ポイント！…可能の助動詞「可」は許可を基本義に、さまざまな意味を表す。

・可_シA_ス

▼Aすべし。

▽①許可(～してよい)

②当然(～するべきだ)

③適当(～する方がよい)

④可能(能力的に・許可されていて)～することができる

・「可_ニ以_テ」の形をとることもある。

可_ニ以_テA_ス

▼以_テAすべし。

▽Aしてよい。

Aすることができる。

③ 可能の助動詞「得」

「得」も可能の助動詞なんだが、まず普通の動詞としても用いられるから、そこところから整理しよう。
「得^う桃^も」（桃を得る）なら、これは動詞。

なぜかって？ 当たり前だろ、助動詞は動詞を目的語にとるんだ。

これは名詞「桃」を目的語にとってるじゃないか。

けど、「得^う食^く桃^も」なら助動詞だ。

動詞「食^く」を目的語にとってるからな。

わかったかな？

ところでこの可能の助動詞「得」は、「能^う」や「可^し」とは違って、「行為や状況の客観的な可能性」を表すんだ。

うんとわかりやすくいうと、**機会があるから可能**ってことさ。

つまり、同じ「泳ぐことができる」でも、「能^う游^う」はカナヅチじゃないから泳げる、つまり能力的に泳げるってことだし、「可^し游^う」は、カナヅチじゃなかったり、泳いでもいいよって許可されているから泳げるって意味になる。

でも、この「得^う游^う」は、たとえば泳ぐ時間的なチャンスがあって泳げるってことを表すんだ。

同じ「泳げる」でも色々あるんだってことがわかったら？

このことを、君たちも知ってる有名なシーンに使われた文で確認してみよう。

項 莊 拔^キ 劍^ヲ 起^チ 舞^フ。 項 伯 亦 拔^キ 劍^ヲ 起^チ 舞^フ、 常 以^ニ 身^ヲ 翼^ニ 蔽^ス 沛 公^ヲ。
莊 不^レ 得^レ 擊^ツ。

▼項^{かう}莊^{さう}劍^{けん}を拔^ぬき起^たちて舞^まふ。 項^{かう}伯^{はく}も亦^{また}劍^{けん}を拔^ぬき起^たちて舞^まひ、常^{つね}に身^みを以^{もつ}て沛^{はい}公^{こう}を翼^{よく}蔽^{へい}す。 莊^{さう}擊^うつを得^えず。
▽項^{かう}莊^{さう}は劍^{けん}を拔^ぬき立^たち上^あがって舞^まった。 項^{かう}伯^{はく}もまた劍^{けん}を拔^ぬき立^たち上^あがって舞^まい、常^{つね}にからだで沛^{はい}公^{こう}を翼^{よく}覆^{おほ}うように守^{まも}った。 項^{かう}莊^{さう}は斬^きりつけ^つけることができなかつた。

項羽と劉邦の争いの中でも、チョー有名な、いわゆる鴻^{こう}門^{もん}の会^{かい}の名場面だね。

このまま沛公を生かしといたら、将来必ずやばい存在になると確信してる項羽方の参謀范^{はん}增^{そう}が、宴会場で項王に「はよ殺せ、はよ殺せ！」と、何度もサインを送るのに、肝心の項羽が動こうとしない。

そこで業を煮やした范增が、項王の甥^{おひ}っ子の項莊を呼び出して、宴会の余興に劍舞をして、その機に沛公を殺してしまえと命じたんだっただね。

ところが、項莊が沛公に斬りつけようとしても、項伯も舞いだして、スルスルスル〜と間に入って、からだで沛公をかばうから、どうやっても斬りつけられない。

さて、そこだ！

日本語で「項荘は斬りつけることができない」といっても、できない理由は色々考えられるわな？
まず、そもそも斬りつけるだけの能力がない… んなわけないよな？

だって、それだけのことができるはずだと踏んだ范増が、わざわざ項荘を呼び出したんだぜ？

とすると、できない理由の2つめは、斬りつける許可が下りてないから… これまたあり得んやろ？

だって、項荘は「軍中には酒の肴さかなになる楽しみとでもありませんから、この私、ひとつ剣で舞わせてください」って、事前に項王に許可をとってるんだぜ？

項王だって、おおかた范増が、沛公を殺させるべく手を回したんだろうってわかった上で許可したはずだし、そもそも宴会場にいるみんながわかってたさ。

だから、項伯だって沛公をかばいにかかってるわけだし。

となると、残る理由は、能力もあるし許可もされてるけど、邪魔されて斬りつけるチャンスがなかったからできないってことになるよな？

つまり、「不^レ能^ル撃^ツ」でも「不^レ可^{カラ}撃^ツ」でもない、「不^レ得^ル撃^ツ」でなければならないんだよ、この不可能は！

司馬遷は、ちゃんとそのつもりで「得」を使ったわけなんだね。
わかったかい？

射^テ中^{タレハ}則^チ得^ル為^ニ諸^ル侯^ト、射^テ不^レ中^{タラ}則^チ不^レ得^ル為^ニ諸^ル侯^ト。

▼射^イて中^アたれば則^{スナハ}ち諸^{シヨウ}侯^{コウ}と為^ナるを得^エ、射^イて中^アたらざれば則^{スナハ}ち諸^{シヨウ}侯^{コウ}と為^ナるを得^エず。

▽射^イて(的に) 当たれば諸侯となることができ、射^イて当たらなければ諸侯となることができない。

この例の場合、「得」はやっぱり「(機会があるから) できる」という客観的な可能性を表してる。

つまり、矢が当たれば、諸侯となる機会が与えられて「諸侯となることができる」のだし、当たらなきゃ機会が与えられず「諸侯になれない」わけだ。

ところで、この助動詞「得」は接続詞「而」や「以^テ」と併用されて、複音節の助動詞としても用いられるんだ。

吾^ワ不^レ得^ル而^{シテ}知^ラ也^ヤ。

▼吾^{ワレ}得^エて知^シらざるなり。

▽私が知ることはできない。

何かを得て知らないんじゃない、「得^テ而^ス」で「得^{スル}」と同じで「〜することができる」って意味。

「得^テ以^ス」の形もとるけど、やっぱり「〜することができる」って意味だ。

「得」単独で用いる場合と比べて、微妙なニュアンスの違いや、否定文や疑問文で用いられることが多いとか、違いがないわけではないけど、君らはおおむね同じ意味だと考えていいよ。

◎ポイント!…可能の助動詞「得」は、「(機会があるから)〜できる」という意味を表す。

・得^レA^{スルヲ}

▼Aするを得^う。

▽Aすることができる。

・複音節の助動詞「得^テ而^ス」「得^テ以^テ」も「得」と同様の意味を表す。

得^テ而^スA^ス

▼得^えてAす。

▽Aすることができる。

得^テ以^テA^ス

▼得^えて以^{もつ}てAす。

▽Aすることができる。

④可能の助動詞「足^ル」

可能の助動詞の最後は「足^ル」だ。

これはもともと「満ち足りる」という意味。

そこから転じて、素質や資格が十分に備わっていて、「〜するに値する・〜するに十分である」という意味とか、「〜できる」という可能を表したりするんだ。

江東^{カウジウ}雖^モ小^{ナリトハ}地方千里、衆^ハ数十万人、亦^タ足^ル王^{タルニ}也。

▼江東^{カウジウ}小^{ナリトハ}なりと雖^モも、地^チは方千里、衆^{シュウ}は数十万人、亦^マた王^{ワウ}たるに足^タるなり。

▽江東(地方)は狭いですが、土地は千里四方、民衆は数十万人、(この土地も)また王となれます。

劉邦に敗れた項羽が逃げ延びようとして烏江^{ウカウ}って川を渡ろうとする有名な場面だよ。

船を用意して待ってた宿場の長が、「自分しか船もつてないから、これ乗って逃げてくだされ」と伝えながら言ったセリフがこの例文だ。

捲土^{ケンド}重来^{チュウライ}を期^イしてくださってわけ。

さて、この例、状況が満ち足りていて「ゝできる」って意味だとよくわかるだろう？
ん？助動詞は動詞を目的語にとるはずなのに、「王」は名詞じゃないかって？
なかなかいいところに気がついたね。

確かに「王」は名詞だけど、ここでは動詞のように働いているんだ。

中国ではこれを**品詞の活用**という。

漢文の活用は、日本語の活用のように語形変化じゃなくて、品詞が変わることをいうんだよ。

名詞が動詞のように働く、つまり動詞に活用するのは、漢文ではよくあることなんだぜ。

ここでは「王」って名詞が助動詞「足」の目的語になることによって動詞に活用したって説明するんだけどね。

ちなみに、ためぐち先生は、活用といっても、「王」という名詞が動詞そのものに変化するとは考えてない。

助動詞の目的語になることで、動詞のように働くことになる、それでいいんじゃないかって思うんだ。

ところで、助動詞「足」は、もともと「満ち足りる」が原義だから、「ゝできる」と訳すより、「**ゝする値打ちがある**」とか「**ゝするに十分である**」と訳した方がピタッとはまることもある。

剣 一人敵、不足学。

▼剣は一人の敵にして、学ぶに足らず。

▽剣は一人の敵を相手にするもので、学ぶ値打ちはない。

これなんかそのいい例だね。

「学ぶことはできない」と訳すと、なんか変だろ？

「剣なんて、学ぶ値打ちはない」と言ったのも、これまた項羽だよ。

それならってことでおじさんの項梁は兵法を教えるんだけど、これまた途中で投げ出しちゃうんだよね。なかなか一筋縄ではいかないやつだよ、項羽って。

さて、助動詞「足」も、「可」のように接続詞「以」と共に用いられて「足_ル以_テゝ_{スルニ}」の形をとることがある。

用いられ方の違いは、だいたい「可」と「可以」の違いに似てるかな。

でも、まあだいたい同じ意味だと考えていいよ。

此一物足_ル以_テ釈_{スニ}西伯_ヲ。

▼此の「一物以て西伯を釈すに足る。」

▽この一つの物（＝献上品）で十分西伯を釈放してやる値打ちがある。

この「足以」も「値打ちがある」って意味だな。

西伯ってのは、周の文王のこと。

殷周革命を行った周の武王のお父さんだよ。

さて、主にあたる悪逆非道な殷の紂王が、自分を批判する人をことごとく殺したり捕らえて牢に放り込んでるんだ。

文王も「天下の人々の心が紂王ではなく、文王に集まって危険です」なんて中傷されて捕まっちゃう。でも、文王の家臣はちゃんと大量の贈り物を紂王に献上して釈放してもらったわけ。

文王も立派な人物だが、家臣もちゃんと融通のきく連中だったわけさ。

◎ポイント！…可能の助動詞「足_ル」は「（素質や資格が備わっていて）～できる」という意味を表す。

・足_ル A_{スルニ}

▼Aするに足る。

▽Aすることができる。

Aする値打ちがある。

Aするに十分である。

・「足_ル以_テ」の形をとることもある。
足_ル以_テ A_{スルニ}

▼以てAするに足る。

▽Aすることができる。

Aする値打ちがある。

Aするに十分である。

3. 適当・当然・義務の助動詞

漢文の助動詞には「～するべきだ」という意味をもつものはいくつかある。

一口に「べきだ」といっても、いろんなニュアンスがあるだろう？

「しなければならぬ」という場合もあれば、「する必要がある」という場合もある。

「した方がいい」とと柔らかい感じもあるな。

そのいろんなニュアンスを漢文では、「当_{マシ}」とか「応_{マシ}」、「須_{スベカフツ}」、「宜_{ヨウシク}」、「可_{ヘシ}」などの助動詞

で、それぞれ受け持つてゐるんだ。

いいかい？ 助動詞だから、動詞を目的語にとるんだぞ。

つまり必ず動詞の前で用いられるんだ。

①当然・義務・推定の助動詞「**当**・**応**」

「**当**・**応**」の基本義は「相当」だ。

つまり「物事の道理に照らせば」に相当する」というのがもともとの意味。

だから、道理に照らして相当するんだから、「**当然**するべきだ」という**当然**や**義務**の意味を表すことになるし、道理に照らして相当するんだから「**きつと**するだろう」という**推定**の意味ももつことになるんだ。

少**壮**真**当**努力**年**一**過**往**何**可**攀**援

▼少**壮**真に**当**に努力すべし、年一たび**過**往すれば、**何**ぞ**攀**援すべけんや。

▽若く盛んな時は本当に努力すべきだ、年がひとたび過ぎ去れば、どうして取り戻すことができようか。

この「**当**」は当然を表してる。

「くするべきだ」って意味だ。

日本では「まさしくベシ」と読む再読文字として特別扱いしてるが、別に特殊な漢字でも何でもないぞ。もちろん中国人は二度に分けて読んだりしない。

再読文字だからって、「当然」と「べきだ」の2回に分けて訳さなきゃならないわけじゃないから、こだわる必要はない。

学校の先生の中には、頭に「当然」をつけてないと誤答扱いしたりする人もあるんだが、ほんと困ったことだよ。

つけたって別にいいけど、つけなきゃならないわけじゃないんだよ。

さて、この例文、年とってしまったら二度と取り返せないのが年月なんだから、そういう道理に照らせば若い時は努力しなきゃならんってわけだ。

君らのことを言ってるんだよ。

罪**応**受**死**

▼罪**応**に死を受くべし。

▽罪は当然死刑を受けるべきである。

この「応」も訓読では「まさしくベシ」と読む再読文字。
ここでは当然を表してゐる。

訳には「当然」をつけてるけど、「くするべきだ」と訳せばいい。
道理に照らして死刑相当だって自覚してるんだよ。

孫子度其行、暮当至馬陵。

▼孫子其の行を度るに、暮れに當に馬陵に至るべし。

▽孫子がその（＝龐涓の軍）の行程をはかると、（軍は）暮れに馬陵に至るはずである。

この「當」は推定だ。

「きつとくだろう」とか「くするはずだ」って意味。

孫子つてのは有名な兵法家だね。

敵將龐涓の軍は暮れに馬陵に到着するのが相当と判断したわけだ。

その読みが見事当たって、龐涓は孫子の策にはまり、ひどい目にあつて死んじゃうんだけどね。

君自故郷来、応知故郷事。

▼君故郷より来たる、應に故郷の事を知るべし。

▽あなたは故郷から来た、きつと故郷のことを知ってるのは理の当然というわけさ。

この「應」も推定。

やっぱり「きつとくだろう・くするはずだ」って訳す。

故郷からやって来たんだから、故郷のことを知ってるのは理の当然というわけさ。

教科書なんかではあんまり出くわさないが、「合」や「該」も、「当・応」と同じ意味を表すことがある。
これも「当・応」と同じく「合にくべし」「該にくべし」と再読文字として読むんだぜ。

「合」は「合う・適合する」の意から、「該」は「軍中における約束」の意から、それぞれ道理に照らして当然であるという意味を表すようになったのさ。

教科書では出あわなくても、実力テストや入試問題には時々出てるから注意しろよ。

◎ポイント！……当然・義務・推定の助動詞「当・応」は、「道理に照らして当然である」が基本的な意味。

訓読では「まさしくベシ」と再読文字として読む。

・当^ニ A^{。ス}・ 応^ニ A^{。ス}

▼当^{まさしく}に A すべき。・ 応^{まさ}に A すべき。

▽ A するべきだ。(当然・義務)

きっと A するだろう・ A するはずだ。(推定)

・「合・該」も同じ意味を表し、「まさしくベシ」と読む。

さて、この「当」や「応」は、古典中国語文法でも、助動詞じゃなくて副詞だと説かれることがある。

それは動詞以外に形容詞を目的語にとったりすることがあるというのが1つの理由。

また、推定の意味は普通副詞が受け持つ働きなので、そちらに分類するべきだというのもう1つの理由だよ。

学者によって、どの品詞に該当するかという考え方が違うんだ。

もともと助動詞が動詞を目的語にとるということは、言い換えれば動詞述語の前に置かれるってことだから、副詞と同じ位置にあるってことだよ。

昔の中国人は、これは副詞だとか、これは助動詞だとか、いちいち文法考えて話したり書いたりしてたわけじゃない。

だから同じ位置にあつて意味を添える語という点では、助動詞と副詞の区別は判然としないところが実はあるんだ。

それで学者の意見が分かれてるわけだね。

でも、君らの場合、それ言われてもなあ…

ややこしくなるんで、一応助動詞ってことにしとくんで、そこんところよしくな。

②必要・必然の助動詞「須^{ラク}」

「これは必須の知識です」なんていうだろう？

「須^{ラク}」はもともと「用いる」という意味から転じて必要や必然を表すようになった助動詞なんだ。

「必須の知識」ってのは、「知つとく必要がある知識」ってことだな。

この講義なんて「必須の知識」だらけだぜ。

「須^{ラク}」は、「**つとく必要がある**」を基本として、「**必要があるからつとくすべきだ**」なんて、当然を表すこともあるぜ。

「ゝする必要がある」と「ゝするべきだ・ゝしなければならない」はほとんど親戚みたいなもんさ。文脈からどうとでも解せるんだから、あんまり訳し方にこだわるなよ。要は、「須^ス」が必要・必然を基本としていることがわかればいい。

凡^ソ事^ハ皆^シ須^ス務^ム本^ボ。

▼凡^ソ事^ハ皆^シ須^ス務^ム本^ボ。→「凡そ事は皆須らく本を務むべし。」

▽すべて物事はみな根本に力を尽くさなければならない。

これは必要を表してる。「ゝする必要がある」って意味。

だいたい世の中の連中は枝葉ばかりにこだわって、物事の根本を見据えてない奴が多いじゃないか。今時の大人の多くもそうだが、君らもおんなじだぜ。

「根本に力を尽くさなければならぬ」と訳せば当然・義務の感じだが、むしろその必要があるんだといいたいんだ。

いいか？学生の本分は学ぶこと。

それを後回しにしてる奴はこの言葉がぴったりだ！と、お説教のひとつもかましつつ。

今日^イ送^ル君^{キミ}須^ス尽^ス醉^シ。

▼今日^イ君^{キミ}を送^ル須^ス尽^ス醉^シ。→「今日君を送る須らく酔ひを尽くすべし。」

▽今日は君を見送る（日だ）酔いつぶれてしまふことになるだろう。

こいつは必然だな。

「（必然的に）ゝすることになるだろう」って意味。

今の旅とは違うんだ、一度別れたら今度はいつ会えるかわかんない、ひょっとしたら二度と会えんかもしれん。

そういう旅立ちに際しては、別れを惜しんで必然的に酔いつぶれてしまふってことさ。

でも、実はこの例文、「酔いを尽くす必要がある」、「つまるところ飲んでくれ」という意味にも解釈できるね。

これは詩の一節で、賈^カ至^シって人が作者なんだが、つまらんことに連座して左遷されてたんだ。

そこへ友人の李^リ侍^シ郎^{ロウ}って人が同じく左遷されていくって聞いて開いた別れの宴なんだよ。

君の気持ちわかるから飲もうぜってこと。

さてさて、「酔いつぶれてしまふだろう」なのか「とことん飲んでくれ」なのか、どっちなんだろうねえ。

君たちはどう思う？

ところで、「須」も再読文字として「すべからくべし」と読むんだが、くどいようだが、それは日本人だけの習慣だ。別に特別な文字じゃないぞ。

ところが、この「須」は再読しないこともあるんだ。

「不須」のように否定されたり、「何須」のように反語で用いられる時は、それぞれ「(する)を須ぬず」「(くする必要がある)」、「何ぞ(する)を須ぬん」(どうしてもする必要があるのか、いやない)と、「もちマル」(ワ行上一段活用)と読んで再読しない。

「もちフ」(ハ行上一段活用)と読むこともあるな。

これはたとえば「すべからくすべからず」ではあまりにもダラダラした感じになっちゃうからだろうな、やっぱり。

◎ポイント!…「須」は、必要・必然が基本的な意味。

・須^{ラカ}ス^シA。

▼須^{スベカ}らくAすべし。

▽Aする必要がある。(必要)

Aするべきだ・Aしなければならぬ。(当然・義務)

Aする(ことになる)だろう・Aする(ことになる)はずだ。(必然)

・「不須」(くフもちマルズ)・「何須」(なんゾくフもちマルン)の形は再読しない。

③ 適当・適切な助動詞「宜」^{シク}

「宜」はもともと「妥当である・ふさわしい」って意味を表す形容詞だ。

そこから助動詞に転じて、道理や状況に照らして、「くするのがよい・くするほうがよい・くするにふさわしい」っていう意味を表すようになったんだ。

路^{ミチ}已^{スデ}遠^{トホ}、君^{キミ}宜^{ヨウ}しく還^{カヘ}るべし。

▼路^{ミチ}已^{スデ}に遠^{トホ}し、君^{キミ}宜^{ヨウ}しく還^{カヘ}るべし。

▽道はすでに遠い、君は帰った方がよい。

ずいぶん遠くまで来たから、もう帰った方がよいよってことだ。
状況に照らしてそうすることが適當・適切だって判断したわけだな。

此人宜^シ在^ル帝^ノ左右^ニ。

▼此^コの人宜^ハしく帝^ノの左右^ニに在^アるべし。

▽このひとは皇帝のおそばにあるにふさわしい。

「おそばにいるのがよい」って訳してもいい。

要するに人物・能力に照らして、皇帝の側近たるにふさわしいって判断したわけだ。

◎ポイント!…「宜」は、道理や状況に照らして適當・適切であるが基本的な意味。

・宜^シくA^ス。

▼宜^ハしくAすべし。

▽Aするのがよい。

Aする方がよい。

Aするにふさわしい。

④ 適當・適切な助動詞「可^シ」

許可が基本義の「可^シ」も「^ハする方がよい」「^ハするべきだ」って意味を表すことは、可能の助動詞「可^シ」のところで説明済みだ。

読み返しとけよ。

4・希望・願望・意志の助動詞

「^ハしたい」ってのは自分の希望を表すだろ？

「欲^ハ・願^ハ（願^ハ）」がその意味を受け持つ助動詞だ。

また、「^ハしようと思う」ってのは意志、こいつは「肯^ハ・敢^ハ」がその意味を引き受けてるし、「欲^ハ」もその意味で用いられることがある。

①希望・願望の助動詞「欲^ス」

「欲^ス」はもともと「ほしがる・望む」という意味の動詞だ。

これが動詞を目的語にとると、助動詞に転じて、「くしようとする・くしたいと思う」などの意志や希望の意味を表すんだ。

また、形容詞を目的語にとることもある。

その場合は、「くであるべきだ・くでありたい」という客観的な願望を表すんだ。

我^レ欲^レ殺^レ之^ヲ、為^ニ其^ノ功^多、故^ニ不^レ忍^ビ。

▼我^{われ}之^{これ}を殺^{ころ}さんと欲^{ほつ}すれども、其^その功^{こう}多^{おほ}きが為^{ため}に、故^{ゆゑ}に忍^{しの}びず。

▽私は彼を殺したいと思うが、その功績が多いために、殺すに忍びない。

毎度残酷な例文で済まんね。

漢文にはいっぱいあるんだな、残酷な例が。

この「欲^ス」は自分の希望を表して、「くしたい」って意味だ。

「くしようと思う」と訳してもいい。

陽貨^ニ欲^レ見^{ント}孔子^ヲ。

▼陽貨^{やうくわく}孔子^{こうし}を見^みんと欲^{ほつ}す。

▽陽貨が孔子に会おうとした。

この例文の場合、「会いたいと思った」と訳すよりは、「会おうとした」と訳すほうがいい。

「欲^ス」は、希望を表す助動詞なんだが、希望の意味が虚化して「くしようとする」という意志の意味を表すことも多いんだよ。

心^ハ欲^レ小^{ナルヲ}而^ハ志^ハ欲^レ大^{ナルヲ}。

▼心^{こころ}は小^{ちひ}なるを欲^{ほつ}して 志^{こころざし}は大^{だい}なるを欲^{ほつ}す。

▽心は小でありたく（＝心配りは繊細でありたく） 志は大でありたい。

通常、助動詞「欲^ス」は動詞を目的語にとる。

けれども、イレギュラーな例として、ここで「欲^ス」は「小^{ナリ}」「大^{ナリ}」という形容詞を目的語にとってい

る。

こういう場合、道理に照らしてどうあるべきかという客観的な願望を表すんだ。

「〜でありたい」なんて訳せばいい。

この例のように、「欲」が形容詞を目的語にとってるから、助動詞に分類するのはどうか？副詞の方がよくないか？なんて言われたりするんだよ。

◎ポイント……「欲」は、「ほしがる・望む」から転じて、自分の希望や意志を表す。

・欲^ス A^{セント}

▼Aせんと欲^{ほつ}す。

▽Aしたいと思う。・Aしようとする。（Aは動詞）

Aでありたい。（Aは形容詞）

ところで、「欲」には「〜しそうである」という意味を表す用法がある。

たとえば、「天欲^ス曙^{あけぼの}」という文は「空が明けようとしている」という意味だが、まさか「天」が希望や意志をもつわけないだろう？

これは「明けそうである」という意味で、これはさすがに助動詞ではなく時間副詞に分類されてるんだ。漢文では時制をうけもつのは主に時間副詞だからだよ。

いいかい？ 1つの漢字がこの品詞と決まってるわけじゃない、働きにに応じてふさわしい品詞が与えられるってわけだ。

でも、こういう細かいことはあんまり気にしなくていい。

むしろ、どの位置に置かれて、どんな意味を表す語なのかを理解してほしいな。

②希望・願望の助動詞「願^{ハクハ}」（願^フ）

「願」は「願う」って読むだろう？ だからもちろん希望・願望の助動詞さ。

「〜したい・〜したいと思う」という自分の希望を表す。

でもな、あくまで「自分が〜したい」という意味を表す時だけで、「人が〜することを願う」ってのは助動詞じゃなく動詞だ。

はあ？って思っただろ？

でも、次の例で確認してみな。

願^{ハクハ}受^ヘ教^{ケシ}於^ニ夫子^{フシ}。

▼願はくは教へを夫子に受けん。

▽ご教示を先生に受けたいと思います。(↓どうかご教示を先生に受けさせてください。)

「願」は動詞「受」を目的語にとってるだろ？

だから動詞に「くしたい」という意味を添えて、「ここでは「受けたい」という意味を表してる。つまり動詞を目的語にとる助動詞さ。

訓読の習慣で「願ハクハ」と先に読んでるけど、「願」受_二教_一於_二夫子_一と、返って読んでもいいんだぜ。

ところが、次の文はどうだい？

願 陛 下 察 之。

▼願はくは陛下之を察せよ。

▽陛下がこれをお察しくださることを望みます。(↓どうか陛下これをお察しく下さい。)

「願」が目的語にとってるのは「陛下察之」(陛下がこれをお察すること)という名詞句だろ？動詞を目的語にとってないじゃないか。

だから助動詞じゃない、「願」は動詞そのものなんだよ。

つまり、自分がしたいわけじゃない、人にしてほしい場合は「願う・望む」という意味の動詞だつてことさ。

だから、訓読ではやっぱり「願」なんて読んでるけど、構造的には「願陛下察之」と読む方が忠実だね。

◎ポイント！…「願」は、自分の希望や意志を表す。人に対して望む時は動詞。

・願_{ハクハ} A_{セン}

▼Aせんことを願ふ。

・願_{ハクハ} A_{セン}

▼願はくはAせん。

▽Aしたい。

Aしたいと思う。

③希望・意志の助動詞「肯」

「肯」って漢字はどういう時に使う？

「肯定」はすぐ思い浮かぶかな？ そうだと認めることだね。

「首肯」はちよつと難しいか？ もっともだとうなずくことさ。

つまり、「肯」はもともと「認める」という意味の動詞なんだ。

そこから「前向きに肯定してしようとする」という意志を表す助動詞に転じたんだよ。

でも、この「肯」は、あまり単独では使われず、否定を表す副詞と一緒に用いられて、「不^{ンゼ}肯^{スルヲ}」（～しようとはしない）・「未^ダ肯^{ンゼスルヲ}」（まだ～しようとはしない）の形をとることが圧倒的に多いんだ。

だから、みんなはこちらの形を覚えておこう。

叔 齊^モ 亦^タ 不^{ンゼ} 肯^{スルヲ} 立^ツ 而^カ 逃^カ 之^ヲ。

▼叔齊も亦た立つを肯んぜずして之を逃がる。

▽叔齊もまた即位しようとはせずにこれ（＝国）を逃れた。

「不」は「～しない」という意味を表す否定副詞。

だから「不^{ンゼ}肯^{スルヲ}」は「～しようとはしない」って意味になる。

伯夷と叔齊は、殷王朝が周に滅ぼされた頃の孤竹^{こちく}つて国の人。

その孤竹の君主が、子供の中でも兄弟3番目の叔齊を特にかわいがってたんだ。

だから、おやじの君主が亡くなった後、長男の伯夷が、「おやじが跡継ぎにしたかったのは弟の叔齊だし

…」とか言つて国を出ちゃったんだ。

そしたら、弟の叔齊も「兄さんを差し置いて即位なんてできないよ」って、これまた国を出ちゃった。

叔齊は心で望んでないだろ？

だから即位しようとはしなかったんだ。

そういう気持ちを「不^{ンゼ}肯^{スルヲ}」が表してるんだってこと、押さえておこう。

ところで、「伯」と「叔」は兄弟の順番を表すんだ。

「伯↑仲↑叔↑季」の順で、「伯」が長男、「季」が末っ子。

だから、君らもお父さんのお兄さんであるおじさんを「伯父」っていうし、弟さんであるおじさんを「叔父」っていう。

どちらが兄か弟かわからないほど実力が均衡してることを、「実力伯仲」っていうんだぜ。

知ってたかい？

とまあ、これが否定副詞「不」と共に用いられて「不肯^{ヘンケ}」の形をとる例だ。

「未」を伴う場合もあるぞ。

彼未^タ見^ミ吾^ガ大将^{ダイジョウ}旗鼓^{ハキコ}未^タ肯^{ケン}撃^{ツク}前行^{ヘンギョウ}。

▼彼^{かれ}未^{いま}だ吾^わが大将^{たいやう}の旗鼓^{きこ}を見^みざれば、未^{いま}だ前行^{ぜんかう}を撃^うつを肯^{がへ}んぜざらん。

▽彼（＝敵軍の将）はまだ我が軍の大将の軍旗と太鼓を見ていないので、まだ先行部隊を攻撃しようとはしないだろう。

「未^タ」は「まだくしない」という意味だから、「未^タ肯^{ケン}く^ク」は「まだくしようとはしない」って意味だ。

これは有名な「背水の陣」からの例。

名将韓信^{かんしん}将軍が、敵の動きを予測してる場面だよ。

つまり、敵軍は狭い入り口から進軍してくる我が軍を見てるわけだが、こちらの大將の軍旗と太鼓をまだ見てないから、先行部隊を攻撃するわけにはいかん。

へたにそんなことしたら、大將は入り口に入る前に逃げ出しちゃうからな。

だから、堂々と軍を進めればいいってわけ。

つまりこの例わかったかな？

「攻撃していいと納得してない」わけだ。

だからまだ攻撃しようとしないうってわけさ。

助動詞「肯」でちょっと面倒なのが読み方だ。

だいたい「がへんず」ということは自体がなんのこっちゃい？って感じだろ。

もともと「承知しない」という意味の「かへにす」って日本の古語が、打消の意味であることが忘れ去られて、「かへにせず」↓「がへんぜず」でも「承知しない」って意味で用いられるようになったというやこしい経緯のあることばなんだ。

でも、やっかいなのはそのことじゃなくて、「肯」が「あへて」とも読まれることなんだ。

2通りの読み方が通用してるんだよ。

「不肯^{ヘンケ}A」なら、「不肯^{ケン}A」（Aするを肯^{がへ}んぜず）とも、「不肯^{ヘンケ}A」（肯^あへてAせず）とも読む。前の例なら「不肯^{ヘンケ}立^タ」、「未^タ肯^{ケン}撃^{ツク}前行^{ヘンギョウ}」とも読むわけさ。

最近は「がへんぜず」って読まれることの方が多くなってきているように思っけどな。

なんだ、それだけかって？

いやいや、さらにめんどくさいのが、反語副詞や疑問代詞が伴って反語の意味で用いられる時だよ。

「安肯」とか「誰肯」という形をとるんだが、この時は普通「安肯 A」「(どうして)Aしようとするだろつか」「誰 A」「(誰が)Aしようとするだろつか」と読んで、まず「Aするをがへんぜんや」とは読まないね。 な？ ややこしいだろ？

◎ポイント…「肯」は、前向きに肯定する意志を表す。「不肯」「未肯」で用いられることが多い。

・ 不^ン肯^{スル} A[○]
不^ニ肯^{ヘテ} A[○]

▼ Aするを肯^ガんぜず。

▼ 肯^アへて A せず。

▽ A しようとはしない。

↓ どちらの読み方でも同じ意味。

・ 未^ダ肯^ン A[○]
未^ニ肯^{ヘテ} A[○]

▼ 未^イだ A するを肯^ガんぜず。

▼ 未^イだ 肯^アへて A せず。

▽ まだ A しようとはしない。

↓ どちらの読み方でも同じ意味。

④意志の助動詞「敢^{ヘテ}」

「勇敢」ってことばがあるじゃないか。

勇気があって思い切って行動できることをいうよね？

「敢」はもともと「押し切って取る」が原義だ。

それが動詞を目的語にとり、無理や危険があっても押し切って「いしようとする」という意味を表すんだ。

吾^ガ 戦^ヒ 決^{セリ} 矣、敢^{ヘテ} 諫^{ムル} 者 斬^ル。

▼ 吾^ワが 戦^タひは 決^{ケツ}せり、敢^アへて 諫^{イサ}むる 者^{モノ}は 斬^キる。

▽ 私は戦うと決めた、諫言しようとする者は斬り殺す。

俺はもう戦うって決めてるのに、それを無理におして「やめましよう」なんてごちゃごちゃ口を出そうとする奴は斬り殺すぞって意味。

「敢^{ヘテス}A」は「Aしようとする」と訳すけど、そこにこもる気持ちはそんな感じなんだ。

この助動詞「敢^{ヘテ}」は、否定副詞「不^{ヘテ}」を伴って「不^{ヘテ}敢^{ヘテ}」の形で用いられることが多いんだ。
無理や危険をおしてまで「くしようとはしない」という意味。

ところが、この「不^{ヘテ}敢^{ヘテ}」の形、困ったことに「決してくしない」という意味だと間違って教えられていることが実に多いんだ。

そう習ったひともあるんじゃない？

参考書や問題集の解説にも、そんないかがわしいことが書いてあるのが現実だよ。

心ある漢文の語法書や教科書に、正しく「（無理や危険をおしてまで）くしようとはしない」と書いてあるのに、「これでは困る。『決してくしない』という訳がほしい！」なんて、出版社に文句までいう先生もあつたりするとか聞けず。

でも、考えてみるよ。「明日は雨だけど、運動会は敢行します。」ってのは、もともと雨の中で運動会するなんて無理があるんだけど、それをおして行うってことだろ？

それを「不敢行」と否定したら、「決して行わない」って意味になるのかい？

「無理には行わない」って意味になるのが当然だろ？

中国の辞書や語法書には「決してくしない」なんて意味はまったく書いてないのに、前から「決してくしない」って訳してるから！って言い張るんだよ。

昔から「地球は平らだ」と言われてりゃ、地球は丸くなくて平らだってことになるのかい？

だめだぜ、そんな頭の固いことでは。

なんで「決してくしない」という誤訳が、日本でのさばってるのか…ひよつとすると「積極的にくしない」と辞書が何かに書かれていたのを、「積極的にくしようとはしない」と受け取らずに、誤って「くしないことを積極的にする」と解釈したことでもあつたのかなあ…

よくわからんが、とにかく「不^{ヘテ}敢^{ヘテ}」に、「決してくしない」という強い否定の意味はないと、このためぐち先生が断言しておこう！

燕国^ニ有^ッ勇士秦舞陽。年十三^ニ殺人^ニ、人不敢^{ヘテ}忤^{ヘテ}視^セ。

▼燕国^ニに勇士秦舞陽^ニ有り。年十三^ニにして人を殺^スし、人敢^{ヘテ}へて忤^{ヘテ}視^セせず。

▽燕の国に秦舞陽という勇士がいた。十三歳で人を殺し、人は（彼を）まともに見返そうとはしなかった。

人は「決して見返さなかった」んじゃない、へたに見返せば何されるかわかんないから怖くて「見返そう

とはしなかった」んだよ。

「てめえ、何メンチ切ってんだよ！」って…怖いよなあ。

ところで、これによく似た形に「敢^{ヘテ}不^レ」^{イヤセ}」^スってのがある。

これがまたややこしいんだが、「どうして^アしない^アでいられようか」って反語を表すんだ。

それは「敢^{ヘテ}」^ス単独で「豈^ア敢^{ヘテ}」の意味で用いられることがあるからんだが、要するに「敢^{ヘテ}」自体に反語の語気があることがあるってことなんだ。

前の例なら、「不」と「敢」を入れ替えて「敢^{ヘテ}不^レ忤^セ視^セ」にすれば、「見返さずにいられようか！」なんて意味になって、秦舞陽にボコボコにされちゃうことになる。気をつけるよ。

◎ポイント!…「敢」は、無理や危険を押し切って行動する意志を表す。

・敢^{ヘテ}ア^ス。

▼敢^アへてAす。

▽（無理や危険をおして）Aしようとする。

・不^ニ敢^{ヘテ}ア^セ。

▼敢^アへてAせず。

▽（無理や危険をおしてまで）Aしようとはしない。

↓「決してAしない」という意味はない。

敢^{ヘテ}不^レア^セ。

▼敢^アへてAせざらんや。

▽どうしてAしないでいられようか。

↓「不敢A」との違いに注意。

5. 受身の助動詞

何かに「^レされる」という意味を表すのが受身。

これには「被」と「見」の2つの助動詞が用いられる。

「被」はわかりやすいかな？ 熟語も色々あるからな。

たとえば「被害」^ヘつてのは「害^ヘされる」、「被選挙権」は「選挙される権利」だよな。

「見」の方は、「見る」しか知らなかったかな。

でも、これも「被」に負けないくらい、よく用いられるんだよ。

①受身の助動詞「被」(被^{らる})

「被」は、もともとは「掛け布団・寝間着」の意味の名詞だった。

それが「覆う・かぶせる」という動詞に転じて、さらに「こうむる・受ける」の意味をもつようになったんだよ。

もうわかるね？

そこから助動詞に転じて、「くされる」という意味を表すようになったんだ。

したがって、助動詞「被」は、一般に動作の受け手が主語、つまり**受事主語の文や、主題主語の文で用いられて、「くれる・くられる」という意味を表す。**

為^ス私^ヲ闘^ハ者、各^ニ以^テ輕^ニ重^ヲ被^ル刑^セ。

▼私闘^{しとう}を為^なす者は、各^{おののけい}輕重^{ちよう}を以^{もつ}て刑^{けい}せらる。

▽私闘を行うものは、それぞれ罪の輕重により罰せられる。

主語は「為^ス私^ヲ闘^ハ者」だ。

受事主語とも主題主語ともとれるな。

「刑^ス」は処刑するといった意味の動詞。

それが受身の助動詞「被」の目的語になって、「被^ル刑^セ」の形で、処刑される・罰せられるという意味を表してるんだ。

ここで「被」の読み方に、ちょっと注意！

「刑^ス」はサ行変格活用動詞として訓読してるから、「被」は「らる」と読んでる。

これがたとえば「被殺」だったら、「殺^ス」は四段活用動詞として訓読するから「被^{らる}殺^サ」と、「被」は「る」と読むんだ。

え？なんでだつて？ それは日本語の問題だぜ。

古典文法の時間に習ったろ？ 「於」前置詞句のところで説明したじゃないか！

日本語の受身の助動詞「る」は四段・ナ変・ラ変動詞の未然形、「らる」はそれ以外の未然形に接続するつて。

だからだよ。

そこでも言ったけど、漢文訓読では「死」は「死す」と読んでナ変「死ぬ」とは読まないし、「往・去」はそれぞれ「往く」「去る」と読んでナ変「往ぬ・去ぬ」とは読まない。

それにラ変動詞「あり・をり」と読む語(たとえば「在^{あり}」「有^{あり}」「居^{をり}」など)を受身で読むことはま

ずないから、実質的には「被A」の「被」を「る」と読むのは、Aが四段活用 of 動詞の場合のみって考えていいんだ。

それ以外は「らる」って読むんだぜ。

ところが、AとかBとか記号を使って漢文の文法を説明する時、「Aス」とサ変動詞として動詞を代表させるじゃないか。

だから、「被A」は「被_ルA_セ」と読むことになっちゃうんだ。

ここで困ったことに、受身の形は「くセラル」と読むって思い込んでしまったな…

たとえば「被殺」は、「殺さる」なのに「殺せらる」だの「殺さらる」だの誤読する困った奴らが出てくるわけ。

ちゃんと正しい日本語使ってくれよ。

◎ポイント…「被」は、受身の意味を表す。

・被_ルA。 ・被_ルA_セ。
▼Aる。 ・A（せ）らる。

▽Aされる。

・Aが四段活用で読む動詞なら「被」は「る」、それ以外なら「らる」と読む。

②受身の助動詞「見_ル」（見_ラル）

「見」が受身を表すというと、違和感ありまくりかな？

でも、これがまた実によく用いられるんだ。

そもそも「見る」という動作を、視点を変えて、される側から表現すると「見られる」になるけど、そこから「遭う」の意に広がり、さらに助動詞に転じて「くされる」という受身の意味を表すようになったのかもな。

「見_ル」も「被_ル」と同じで、受動者（受け手）が主語となる文や主題主語の文で「くされる」の意味で用いられる。

訓読のしかたも「被」と同じだよ。

盆成括見_ル殺_サ。

▼盆成括殺さる。

▽盆成括が殺された。

主語は「盆成括」で受事主語。

こいつが殺されちゃったわけ。

「殺^ス」は「殺す」という意味の動詞だが、助動詞「見」の目的語になって、「見殺」の形で「殺される」という意味を表す。

「見殺し」じゃないぞ！

「殺す」が四段活用だから、「見」は「る」と読んでは。

これが「見^ル殺害^セ」だったら、「殺害す」はサ変動詞として読むから、「見」は「らる」と読むことになるんだ、いいかい？

◎ポイント！…「見」は、受身の意味を表す。

・見^ルA。・見^{ラル}A。^セ

▽Aされる。

・Aが四段活用で読む動詞なら「見」は「る」、それ以外なら「らる」と読む。

③受身の助動詞を用いる受動文で行為主を示す形

「花子が殺された！」と言えば、「誰に？」と聞きたくなるだろう？

受動文は誰にされたのかを示すことが多いよね。

その場合、「誰（何）に」にあたる内容の前置詞句を後に伴って、「誰（何）に依拠してゝされたのか」を補う形で行為主を示すんだ。

万乗之國被^レ圉^マ。

←

万乗之國被^レ圉^マ於^ニ趙^ニ。

▼万乗^{ばんじやう}の國趙^{しやう}に圉^{こも}まる。

▽万乗の國（＝天子の國）が趙に包圍される。

万乗の国が何によって包围されたかを、前置詞句「於趙」(趙に)が示してる。

前置詞句は述語や述語構造の前にも後にも置かれるけど、受身の行為主を表す時は、右のように通常後に置かれるんだ。

こういう「於」は置き字として読まれないから、今いちピンと来ないかも知れないけど、あえて「万乗の国囲まるること趙に於てす」と読んでみれば、「天子の国が囲まれること趙による」という意味だとわかりやすくない？

つまり、前置詞「於」のところで説明したように、「於趙」(趙に)は、述語「被_レ囲_マ」の依拠性を補ってるんだね。

晏子見_レ疑_ハ。

←

晏子見_レ疑_ハ於_二齊君_一。

▼晏子_{あんし}齊君_{しせい}に疑_{うたが}はる。

▽晏子が齊君に疑われた。

この例でも晏子が誰に疑われたかを前置詞句「於齊君」(齊君に)が示してるんだ。

これもあえて「晏子疑はること齊君に於てす」と読めば、なるほど受身の依拠の対象が齊君で、「齊君による」んだとわかるよね？

◎ポイント！…助動詞「被・見」を用いる受動文は、行為主を前置詞句で示す。

・被_ルA_セ於_二B_一。 ・見_ルA_セ於_二B_一。

▼BにA(せ)らる。

▽BにAされる。

受身の形式には助動詞を用いる以外にも色々あるんだが、ここでは助動詞にしばって説明したよ。

最後に、ちょっと漢文の受身表現をかじっている人は、「所・為」はどうなってるんだ？って思っていないかな？

だって「受身の助字は『被・見・所・為』だ！」と丸覚えさせられたりするからな。参考書にだってそう書いてあるしね。

でも、この「所・為」は助動詞じゃない。

「所」は客体を表す名詞句を作る構造助詞だし、「為」は「なる」という意味の動詞なんだよ。

全然違うんだ。

これらを用いた受身表現もとても大切なんだが、それについては、また、別のところで教える機会がくるだろうから、今はとりあえず置いとけよ。

いやはや疲れた、今日の講義はここまでだ。

次は副詞の学習をしよう。

助動詞の働きをしっかりと復習しとけよ。

印刷・配布禁止